

聞きなれない病名—2021

編集担当 山本 俊幸

動画 Editor's eye
を始めました。

下記よりアクセスください。

<https://vimeo.com/484333009>



「聞きなれない病名」というテーマで2005年に増刊号が組まれた。たくさんの横文字(日本語にならない病名)が並んでいる。昨年5月号の「Editorial」(最近の病名)でも書いたが、新しい病名は次々に出てくる。聞きなれない理由には、新しいので馴染みがないからだけでなく、なかなか経験することがないからというものも含まれている。したがって、聞きなれないかどうかは個人差がある。

本号の「Topics」にはeosinophilic annular erythemaとWells症候群について概説していただいた。先述の「Editorial」でも触れたが、両者の違いはやはり混沌としているようである。「総説」のMorbihan病と肉芽腫性眼瞼炎については、ご意見があればぜひ「声」の欄にお寄せいただきたい。

今回の掲載症例すべてを紹介することはできないので、いくつか簡単に紹介する。ゲムシタビンは強皮症、うっ滞性脂肪織炎、びまん性筋膜炎と似た皮膚硬化をひきおこすことが知られている。偽蜂窩織炎を繰り返して徐々に皮膚硬化が誘導される経過をたどることが多いのか興味深い。Generalized granulomatous dermatitisは、組織学的に肉芽腫の所見がみられ、ほかの非感染性肉芽腫が否定された場合の病名に便利ではあるが、本当に独立した疾患であるかは今後の検討を要する。同じことはBlaschkitisについてもいえよう。ほかに、リンパ脈管筋腫症の皮内硬結がリンパ管の拡張だけで説明がつくのか、lipedematous itchの機序は何か、などの疑問が沸いてくる。まれな爪の腫瘍・onychopapillomaやonychomatricomaはなかなかお目にかかれないので貴重な症例報告である。アミロイドーシスは近年、前駆蛋白によって分類されている。トランスサイレチン由来のアミロイド線維が皮膚に沈着する頻度は少ないようだが、以前は老人性全身性アミロイドーシスと呼ばれていたこのタイプが正しく診断されてこなかった可能性もある。

ご存知のように本誌の掲載症例は、学会発表の抄録からピックアップし依頼する。報告が少ないものは、英文にするのでという理由で断られることも少なくない。今回、協力いただいた先生方に感謝する。